

—海外で活躍する獣医師 (XI)—
人の想いは実現する
 ～国際協力に魅せられて～

南 繁[†] (JICA 派遣技術協力専門家・ガイア動物病院長)



1 夢のミャンマー再訪

2009年2月、私はこの原稿を技術協力専門家として26年ぶりに短期派遣されたミャンマー（当時はビルマ）で執筆している。世界最貧国のひとつ、戦後東南アジアで一番発展していながら鎖国によって後ろ戻りをする国、ノーベル賞のスーチーさんや国民を虐める独裁軍事政権がある、危ない国。しかしながら、私はミャンマーの人達ほど日本人と波長の合う民族はいないと思えるし、彼らの精神文化を尊敬しているビルマ狂である。

前回の派遣を終え帰国した当時の1983年、ある写真雑誌に「未知の国ビルマ」が特集された。偶然にも同じ雑誌に大森貝塚の発見者である「E.S.モース博士が見た19世紀末日本」という記事があり、明治初期の日本人の生活や習慣などが紹介されていた。これを読んだとき、現代のビルマのことを書いていると錯覚した。江戸から明治にかけての日本人は、神仏を敬い、年寄りや子供を大切にし、争いごとを避けて自然と共に生きていた。家に鍵をかける習慣もなく、当時の西洋の知識人達が、この世のパラダイスと評した生活を送っていた。まさに当時のビルマと同然であった。

100年前の日本に会いたければ、ミャンマーに行けば良いのである。そんな国にまたしても派遣されることになった。今回の任地は、英国統治の面影残るヤンゴン（旧ラングーン）から北方600kmのマングレー管区の農村である。30年前とほとんど変わらない風景の中、オートバイで現地の獣医官と共に農村で診療技術を指導しながら乳牛の疾病について調査する。

四半世紀前の派遣先は「ビルマ養豚養鶏開発計画」（1981～1985年）というもので、種豚種鶏を供給する、ヤンゴン国際空港近くの国営農場であった。しかし、プロジェクト終了後、1988年の暴動でほとんどの建物が破壊され、またヤンゴンも都市化の波に飲まれ、当時の

跡形はない。当時の現地の同僚のほとんどは獣医師であったが、畜産セクターに残った者、他の道を撰んだ者、それぞれ様々な政変と困難を乗り越え、逞しく生きている。彼らとの再会ほど嬉しいものはない。今回の任地にひとりで入る私のために、彼らはあらゆる知人、関係者に連絡してくれていた。私が入る現地機関のそれぞれの長はほとんど彼らの友人か知人である。さらに現地で万が一のことがあればと現地の警察や軍隊関係者まで連絡が及び、私の任期中の行動予定までが知れ渡っていた。

2 アフリカ、アフリカ、アフリカ

私は子供のころからずっとアフリカに憧れていた。少年ケニアの冒険に胸をときめかせ、シュバイツァー博士の医療伝道に感動し、将来は必ずアフリカに行って人の役に立つような仕事をする決めていた。米国のケネディ大統領が「平和部隊」というボランティア制度を創設した際は大喜びをした。これが日本にも出来たらいいなと思っていると、高校生のとき「青年海外協力隊」が創設された。私は絶対これに参加してアフリカに行くぞと心に決めた。

父が歯科医師だったことから、なんとなく将来は歯医者になると考えていた。しかし、どう考えてもアフリカ人は歯が丈夫そうで、歯科医師の出番はなさそうである。進路に迷っているときたまたま受験した獣医学部に偶然にも合格してしまった。ここで急激に展望が開けた。それ以来、頭の中はアフリカのみ。寝ても覚めてもキリマンジャロが浮かぶ。大学では徹底的に青春を謳歌したので、成績はいつも超底辺をさ迷い、厳しい先生の追っ手を何とか逃れて卒業。すぐに協力隊事務局を訪ねると、現地の役に立つなら技術経験があった方がいいと諭され、農業共済組合の診療所に勤め、チャンスを待つことにした。

待ちに待って3年後、タンザニアの獣医師隊員の要請に応募し、同時に職場に辞表を提出した。アフリカに到着した時の感激は忘れられない。インド洋を越え飛行機がアフリカ大陸に入る、胸は高まり、まるで映画「ジヨ

[†] 連絡責任者：南 繁 (ガイア動物病院)

〒069-1182 千歳市協和1914 ☎0123-21-2552 E-mail : gaia373@gmail.com

ーズ」のBGMのように響く。やがて着陸，タラップを降りる1歩1歩がしびれ，地上に立った時，全身が感動で電気ショックを受けたように感じた。異文化での体験は，全てが新鮮でショッキングだった。

感謝されることが嬉しかったのは勿論だが，国内では絶対に無理だろうと思うほど，自分自身が鍛えられた。

この2年間がその後の私の人生を方向付けた。国際協力に生きるのだ。

3 失意の日々・恩人との出会い

とは言ったものの，当時の日本では国際協力において私の技術を恒常的に活かせるポストは容易には見つからない。しかも私は試験が苦手である。自慢ではないが高校留年，大学浪人，就職浪人，なんでも経験した。今まで試験で合格したのは獣医師免許と運転免許ぐらいのものである。また海外に行きたいという思いは募る。そのためにJICA職員採用試験や協力隊のシニア隊員資格試験を何回受けても惨敗。国内に就職したいけど，もしも受かってすぐに辞めたら，世話になった方々に迷惑をかけてしまう。結婚して長男が生まれながらも出口が見えないアルバイト生活。乏しい生活費から捻出して上京し，再挑戦。またもや敗北。帰途の夜の飛行機の窓ガラスに映った自分の顔に，妻と子供の顔が重なり，不安感と自分の学力の低さに何度もため息をついた。

ある日，妻の友人を通じて，ある大学の教授と面識を得た。酒好きの先生で何度かお会いするうち，「君が技術協力で専門家派遣できるようなたらきかけてあげよう」と言ってくれた。まさかそのような夢の話がと半信半疑であった。ところが，実はこの教授は医学界では世界的に有名な方で，関係機関に私を推薦され，ついに，夢が実現した。私自身よりも妻の人柄に対する評価が，大きな契機になったことだけは確かである。

4 ビルマでの気付き

家族同伴で赴任したビルマは冒頭にも記したように素晴らしい国であった。ここで養豚・養鶏開発プロジェクトの家畜衛生担当専門家として働いた。妻もボランティアで診断ラボを手伝うなど，文字通り現地に溶け込んで充実した日々を送った。同僚の日本人専門家たちの仕事ぶりからも多くを学んだ。農林水産省から派遣されている彼らは，前任の仕事を受け継ぎ，着々と仕事をこなし，後任者にしっかりと記録を残し引き継いでいる。それに比べて自分は現地の人からは評価されても，単なる一発屋に過ぎないのではないかと。この後，また他の国に運良く仕事を得ても獣医師専門家として恥ずかしくない仕事ができるのか。その原因は，自分が日本の社会で獣医師として一人前になっていないことにあるとようやく気が付いた。

帰国前に日本のテレビの取材があり，カメラに向かって誓った。

「必ず，また帰って来るぞ」

5 国内再就職と自らの拠点づくり

当時の日本の政府開発援助がいわゆるセンター型で，畜産分野の業種は疾病研究，疾病診断，ワクチン製造，凍結精液製造などを主にしていて，私のフィールド技術は出番がなかった。

他方，国内でも35歳の再就職は難しい時代であった。

やっとのことで，豪腕の先輩が農業共済組合に引っ張り込んでくれた。

8年ぶりの国内再就職である。途方もなく忙しい診療所であったが，管轄地域には先進的な酪農家が多く，病気も先進的かつ複雑。個性豊かな4名の獣医師が早朝から晩遅くまで文字通り飛んで回り，その結果を研究発表につないでゆく，活気に溢れた運動部のような毎日であった。ここでも私は同僚に恵まれ，多くの診療経験を積むことができた。皆が協力してくれた業績発表は農林大臣賞を受賞し，おかげで各地から講演を依頼され，プロとしての自信を高めることができた。

しかし，頭の中では，いつも国際協力の文字があった。

90年代のバブル崩壊後，農業共済組合にも合理化の波が打ち寄せ，不本意な仕事をする機会が増えた。考え抜いた末に退職し，1998年に農村地帯の一隅に獣医科病院を開業した。病院名は「人の想いは実現する，多様なものが共に生きる」をテーマとしている，映画「ガイア・シンフォニー」にちなんで「ガイア（地球）動物病院」と名づけた。私の病院のスタッフ採用の第一条件は，この映画に共感することである。

開業は届け出さえすれば良いのだが，果たして続けて行けるのか，不安だらけのスタートであった。親しい農家や友人獣医師らの支援を受け，年中無休，24時間営業で，早朝から深夜まで，呼ばれればどこでも行った。1日の走行距離が450kmを越えたこともある。私も妻もスタッフも毎日ガムシャラであった。何とか軌道に乗ってきた頃，診療中に思わぬ国際電話がかかってきた。

6 20年ぶりの国際舞台復帰，すべてはベトナムへ

開業して5年目の2002年7月，国際協力を専業とする友人からの電話があった。「誰かベトナムに行ける臨床獣医師がいないだろうか。農村に1人で入ってその『ハダシの獣医師』を指導する傍ら疾病の調査をする。現地住み込み，和食洋食なし，通訳なし，英語は通じない。車もなし，彼らのバイクに同伴し，使えるのは携帯電話のみ。任期は11月から4カ月半。この仕事は南さんしかできないと思う。3日以内に返事が欲しい。支援



図1 起立不能牛への灸治療

施術中のハダシの獣医師は腕を買われて隣県の畜産振興計画のアドバイザーを務めるようになった（ベトナム）



図3 スーパーカブの威力

今まで見たなかでの最高記録，6人乗り（ベトナム）



図2 農家庭先で第四胃変位手術

縫合中の女性（ハダシの獣医師）は後に農大獣医学科に進学した（ベトナム）



図4 ベトナム人の手にかかれればバイクで運べないものはない。

機関に推薦するから」というのである。日本の技術協力の手法がかつてのセンター型の農業開発から、援助の効果が農民に直接届く農村開発型に様変わりをしていった。私の得意とする分野への要望が高まっていたのである。

あまりにも唐突な話に頭の中がグルグル回った。私が病院を長期間留守にすることなど考えられない。誰が私の不在中業務を補うのだろう。しかし、「ヨッシャ」と言ってしまった。決心して覚悟したとたんに、自分の周りのすべてが3カ月後の派遣に対して、動き出した。ハプニングもあったが、返事した時点ではとうてい不可能だったことが、見る間に現実に進んでいった。今、思い返してもよく決心したと感心している。

7 現地適応技術

私は乳牛の臨床技術を専門にしている。開発途上国の農村現場で求められているのは、臨床診断や基本的な治

療の指導が多く、あまり高度な獣医技術はむしろ現地での持続性がない。私が新卒で獣医師になりたての頃のベテラン獣医師が大活躍できるような環境である。現地語の教科書もほとんどないので、基礎的な知識を講義したあと、私の経験をもとにした対応策を伝えるようにしている。乳牛特有の疾病の診断方法、静脈注射や経口投薬などの基礎的な手法を確実に出来るように指導することが重要である。

先進国にくらべて機材が不足しているのは当然だが、出来ない理由を考える事を止め、どうしたら出来るか工夫する事を教えている。

2002年に派遣されたベトナムでは、国家政策で急激に酪農が振興されたものの、獣医師の知識が追いつかず、乳熱という疾病すら知られていない状態であった。当然ながら治療用のカルシウム製剤もない。そこで、この病気を診断したとき、あちこちから人用のカルシウム

製剤のアンブルを100本も買い集め治療した。公務員の平均月給が4,000円の国で、乳牛の値段が20～30万円もする。完治させたことで「神様」同然の扱いを受け、村に行くたびに手を合わせて拝まれるのには参った。

粗飼料給与不足による栄養不足の牛が多いので、繁殖障害も多くなる。ホルモン剤が高価で入手し難いため、その辺に生えているヨモギを使ってモグサを作り、お灸を施したところこれが効果テキメン。牛の背に枯れ草を盛り、もうもうと煙をくすぶらせて何やら怪しげな呪文を唱えて発情を来させる、魔法を使う日本人獣医師がいるという噂が広がった。国立農科大学の教官が学生を何十人も引率して見学に来るほどの騒ぎであった。その後、一緒にお灸をして回った「ハダシの獣医師」は、この方法1つで全国を講演して回る有名人になった(図1)。

第四胃変位も日本に比べると単純である。2カ月間も食欲不振でやせ細った乳牛を、四変と診断した。庭先で手術を終えてお茶をご馳走になっている間に、なんと牛が自らの敷きわらを食べ始める。これには村の人も驚く。途方にくれていた小規模酪農家にとっては、まるで救世主出現と思ったことだろう(図2)。

そんなベトナムもここ数年の進歩は目覚ましいものがある。2008年まではほぼ毎年短期派遣された。搾乳が手絞りからミルクカーに変わる時期になりつつあるなど、毎年劇的に変化している。乳価が他の物価に比較して高いため、粗飼料が不足しているのに、配合飼料を増やして飼養する。そのために繁殖障害、乳房炎、蹄病の三大疾病が急速に増え、一時代前の日本を見る思いである。問題の解決が進んでいるとは思わないが、個体診療の獣医療技術の必要性が高まって来ていることだけは確かである。

8 国際協力の基本は飲んで食べること

途上国の現地における国際協力の第一歩は現地の人々との連帯感をもつこと、共有できる接点を見出すことから始まる。多くの場合は同じテーブルを囲み、酒をくみかわすことである。この飲食習慣に彼らの文化が凝集している。これを否定してはともに仕事することは難しい。人間の食生活習慣は様々で、人がそれを食べて生きているわけだから、食べたからといって病気や死に至るわけでもない。たとえ初めに下痢をしても少しずつ免疫力が高まり、多少のことでは体調を崩すことはなくなる。

たしかに日本人になじみのない食べ物や酒類は多々ある。私が今まで味わっただけでも、犬肉、猫肉、牛の後産、生きている白蟻の料理。また、多種類の蛇、ヤギの子宮と胎子、野生動物の精巣と陰茎、多数の子ねずみが浮かんだ酒などなど。日本ではとても想像できないもの

である。

ベトナムの村で地元の宴会に招待された時、犬料理が出てくると聞かされ、まあ多少は犬肉以外の料理もあるだろうと、気楽に構えて臨んだ。ところが、テーブルに並んだものは犬の串焼き、犬汁、茹で犬、犬炒め、血の腸詰めなどなどすべて犬づくし。とうとう食べざるを得なかった。せめてホットドッグを用意して欲しかった。

つい昨日まで尾を振っていたかわいい犬が、変わり果てた姿で目の前に出されたこともあった。一昔前の日本でも客が来ると鶏をつぶして振舞ったのと同じ感覚なのであろう。それからは食事前に素材を聞かないことにしている。お酒を注がれる時も、なるべく瓶の中身を見ないようにしている。なにもたくさん食べる必要があるのではなく、嫌がらずに口をつけることが大事なのだ。そこから会話と交流が始まるのである。

最近では田舎の犬肉レストランもおしゃれになり、ゴールデンレトリバーやシェパードがニッコリ微笑みかけている看板が増えてきた。まるで日本の化粧品のコマーシャルに外人モデルを使うのと似ている。ベトナムの田舎では、牛だけでなく犬や、時には人の後産までも食卓に上る習慣がある。おそらく未知の滋養強壮物質が含まれていると信じているのであろう。しかし、2度と食べたくありませんが、後産は菌ごたえが良く、意外と珍味な酒肴であることを発見した。

犬肉にまつわる話をもう1つ。私の病院では海外からの研修生も受け入れている。昨年ベトナム人研修生を助手にして犬の手術をした。出血を止める電気メスが放つ芳香にビー君が思わずもらした。「ああ、うまそう!」。これだけは飼い主には話せない。

9 小さくなった地球、多くの人との出会い

驚くことに何十年も前に出会った縁が今になって繋がりは始めている。自分の病院のスタッフをフィリピン肉牛改良センターに派遣したら、その場長はかつて来日した際に私の職場で受け入れた研修生であった。タンザニアで協力隊員時代の友人を訪ねたらすぐ近所に当時の助手が住んでいた。昨年初めて赴任したインドネシアでは、私が指導することになっている獣医師2名が数年前に、毎年私宅で開催しているNPOの交流会に参加したことがあった。また、他のインドネシア人獣医師は私の親友の職場で研修していた。不思議な出会いは数えたらきりが無い。その度に、驚いたり感動したりするのだが、何か大きな力が働いているような気がしてならない。

10 強い想いは実現する

私の赴任先には技術や知識に渴望した熱心な現地人獣医師が多く、こちらも協力し甲斐がある。明治初めに日

本へ来たお雇い外国人たちが味わった気持ちは、このようなものだったのではと想像している。どこの国の人であれ、多くの人から感謝を受けることは、人間として大変幸せなことであり、獣医師冥利につきる。

私はまもなく還暦を迎える。今まで自分の能力を他人に補ってもらい、数えられないほどの人にお世話になり、結局は自分の思ったようになってきている。

私の派遣によって、忙しい思いをしている同業の妻、病院のスタッフ、不便をかけている飼い主さん、国内外のJICA関係者の皆様に感謝しつつ、臨床獣医師になった幸せを噛みしめている。

個人営業では不可能な海外派遣や研修員受け入れも、スタッフを抱え協働体制をとり、地域の同業獣医師たちとの協業ネットワーク化することで実現できるようになる。臨床獣医師の国際協力参加の道はこれからいろいろと多様化していくであろう。最近協力隊の農業関連の隊員募集に応募者が少ないと聞く。地球が小さくなる一方で私たち日本人が内向きになりすぎては、何の発展もない。日本の外へ一歩出れば文化、習慣、宗教の違いに

より誤解や混乱も多く、リスクがないとは言えないが、現地の人たちは優しく親しみがある。海外での技術協力には国内では再現不可能な醍醐味がある。何よりも地球市民として、自分のプロフェッションを活かし多くの人と交流し支えあえる楽しみは私たちの特典である。これからは出来るだけ多くの地球人にバトンを渡してゆくつもりである。これから獣医師になって国際協力を目指そうという方々も自分の夢を強くイメージしてほしい。貴方の夢は必ず実現する。

略 歴

1949年、大阪生まれ。1973年、酪農学園大学獣医学科卒、道南農業共済組合就職。1976～78年、青年海外協力隊（タンザニア）。1981～83年、JICA長期派遣専門家（ミャンマー）。1984～98年、石狩NOSAI。1998年、ガイア動物病院開業。2002年より毎年ベトナム、インドネシア、ミャンマー等へ短期派遣により技術協力。国内的にもNPO法人を運営し海外研修生、協力隊員候補生を受け入れ、職員の海外派遣や帰国協力隊員の受け入れなども実施。